

Making Connections

The Inward Mission November 2014

ブリティッシュ・カウンシル主催 第 6 回英国大学視察訪問報告書

10 - 13 November 2014, UK

目次

1. はじめに	Page 2
2. University of Manchester	Page 4
3. University of Bradford	Page 7
4. Leeds Beckett University	Page 13
5. University of York	Page 19
6. De Montfort University	Page 28
7. 巻末資料(第 6 回英国大学視察訪問参加者リスト)	Page 34



はじめに

英国の公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルでは、日本の大学で国際企画、国際交流を始め様々な部署でご活躍の教職員の方々を対象に、英国の高等教育システムおよび大学の国際化に関する諸施策への理解を深めて頂くことを狙いとして、2014年11月10日から13日までの日程で、「第6回英国大学視察訪問」を実施致しました。

プログラムには、15大学(国公立大学11、私立大学4)から、総勢18名にご参加頂きました。訪問先は、国内最大規模の研究型大学であるマンチェスター大学、中規模ながらもビジネス・平和学などで特色ある研究・教育を行うブラッドフォード大学、学生サービスの質の高さに定評があり、スポーツ分野の研究・活動に力を入れるリーズ・ベケット大学、1963年創立と比較的歴史が浅いにもかかわらずラッセル・グループの構成校であり、世界大学ランキングでもトップ150位以内に位置するヨーク大学、学生のほぼ全員に海外留学の機会と資金援助を与えるプログラムを導入したデモントフォート大学の5大学です。イングランド北部・中部の、歴史・規模や特色のそれぞれ異なるこれらの大学を視察し、各大学の国際戦略、ブランディング戦略、学生の海外派遣支援・留学生支援の取り組みなどについて、比較対照をしながら理解を深めることができました。訪問先では参加者による各所属大学の国際戦略・学生の送り出し支援などに関するプレゼンテーションを実施したほか、訪問先の国際部職員、日本と関わりのある教職員や日本人留学生とのインフォーマルな交流の機会や、キャンパス・ツアーにより各機関の施設を見学する機会も設けられました。

以下、本視察訪問の参加者全員にご執筆のご協力を頂き、視察訪問報告書を作成しました。参加者の皆様が視察訪問をとおり得られた情報や知識、ご感想を広く共有させて頂き、日本の大学のあらゆる部署において日々、留学生や協定校関連の業務に取り組まれている方々のご参考となりました幸いです。

ブリティッシュ・カウンシル

【第6回英国大学視察訪問開催概要】

実施日時：2014年11月10日(月)～11月13日(木)

日本側参加機関：(アルファベット順)

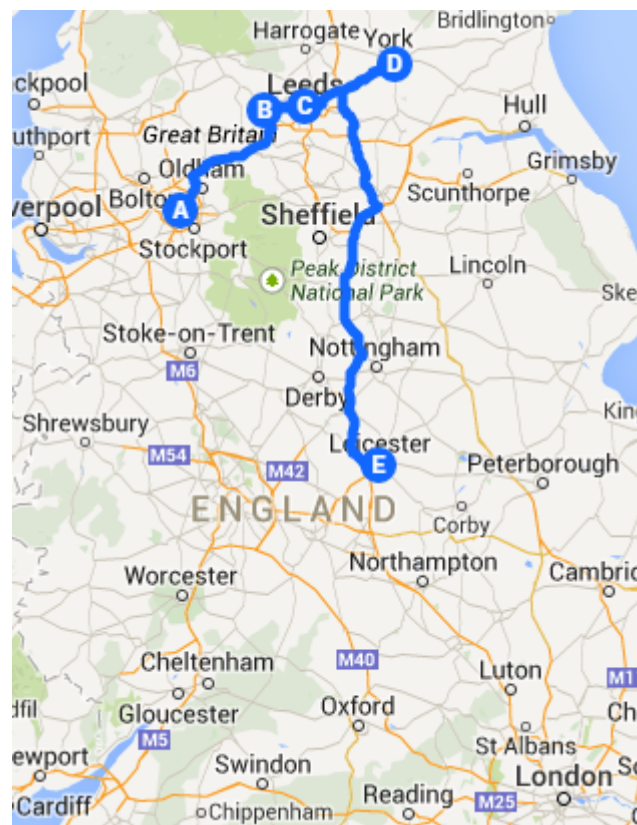
千葉大学、一橋大学、関東学院大学、慶応義塾大学、神戸大学、京都大学、九州大学、沖縄科学技術大学院大学、大阪大学、立命館アジア太平洋大学、信州大学、東北大学、東京工業大学、東京外国語大学、横浜国立大学(計15大学)

主催：ブリティッシュ・カウンシル

英国大学視察訪問 訪問大学一覧

訪問日		訪問先
11月10日(月)	A	University of Manchester 訪問
11月11日(火)	B	午前、University of Bradford 訪問
	C	午後、Leeds Beckett University 訪問
11月12日(水)	D	University of York 訪問
11月13日(木)	E	De Montfort University 訪問
11月14日(金)		(オプショナル参加) 夕刻、ブリティッシュ・カウンシル本部にて、“Experience Japan Exhibition” (慶応義塾大学主催、ブリティッシュ・カウンシル共催の日本留学フェア) 参加校代表者、本視察訪問参加者、及び英国大学代表者を迎えてのネットワーキング・レセプション

第 6 回英国大学視察訪問 国内移動マップ



本報告書は、参加者の方々にご執筆頂き、ブリティッシュ・カウンシルが全体のとりまとめを行った上で作成したものです。参加者の皆様のご協力に、深く感謝申し上げます。文中、金額はすべて£1=184 円で換算しております。また報告書内、「所感」につきましては、執筆者である参加者の皆様のご意見であり、ブリティッシュ・カウンシルの公式見解ではございません。さらに 4 頁以降、参加者、報告担当者のご氏名は、所属機関名アルファベット順、敬称略で記載しております。予めご了承下さい。



1. 大学の概略

マンチェスター大学はイングランド北西部の大都市マンチェスターに位置する、英国内最大規模を誇る研究型大学で、国内 24 の研究型大学から成るラッセル・グループの構成校。2004 年 10 月に、Victoria University of Manchester と UMIST (University of Manchester Institute Science and Technology) が合併し、現在の形となった。Engineering and Physical Sciences、Humanities、Life Sciences および Medical and Human Sciences の 4 つの学部で、400 以上の学位プログラムを提供している。学生数は 38,430 名と国内で最多を誇り、うち 8,990 名が留学生。教職員数は 11,080 名。

他に類を見ない総合的・大規模教育機関として、英国内で最も多くの公的な研究交付金を得る大学の一つであり、研究・教育施設への 6 億 5,000 万ポンド(約 1,200 億円)の投資を行っている。また、2020 年までに世界トップ 25 の研究大学となることを目指している(2013 年の上海交通大学の Academic Ranking of World Universities では、研究・教育面で世界第 41 位の評価を得ている)。これまでに物理学、化学や経済学などの分野で 25 名のノーベル賞受賞者を輩出しており、2008 年度の Research Assessment Exercise¹では、「研究力」ランキングで英国内 3 位の評価を受けた。2014 年度の Research Excellence Framework (REF) では、研究の 83% が「世界トップレベル (world-leading)」または「国際的に優秀 (internationally excellent)」という評価を受けた。

2. 訪問スケジュール

9:00 マンチェスター大学の紹介 (Charlie Pybus, International Officer)

9:30 国際戦略 (Mike Gibbons, Director of Student Recruitment and International Development)

10:15 日本の大学の参加者によるプレゼンテーション

11:00 国際化業務 (Fiona Brown, Head of International Office)

11:45 マーケティング戦略 (Terry Hudghton, Head of University marketing)

12:30 キャンパス・ツアー (Emma Dixon, International Collaborations Administrator)

13:00 昼食会

14:00 学生生活支援 (Jenny Wragge, Student Experience and Evaluation Manager / Emily McKintosh, Student Support Advice & Guidance Manager / Tammy Goldfeld, Deputy Director of the Careers Service)

15:00 レピュテーション・マネジメント (Helen Barton Director of Planning, Planning Support Office)

¹ RAE: 英国高等教育機関の研究の質評価を行うシステムで、2014 年からは新たな指標である REF が用いられている。

3. 発表要旨

国際戦略

Mike Gibbons, Director of Student Recruitment and International Development

International Strategy at the University of Manchester

マンチェスター大学では、副学長を長とする国際戦略委員会 (International Steering Group) を 2011 年に設置した。本委員会は、国際戦略が大学全体の戦略に合致するよう遂行することをねらいとしている。国際戦略は、研究の国際化、キャンパスの国際化、教育の国際化、留学生のリクルート、海外奨学金プログラム、海外の企業や研究機関との連携、の 6 つの項目から構成されている。マンチェスター大学では、国際戦略を実施するにあたり、各重要国に担当教員を指名しており、各担当教員の責任で国際化を進めている。海外の企業や研究機関との連携については、米国との実績をモデルとして他国でも実施する。留学生リクルートについて、留学生からの授業料等を、2004 年の 4,600 万ポンド (約 85 億円) から 2014 年には 3 倍の 1 億 5,000 万ポンド (約 276 億円) にすることを目標としており、2013 年は 1 億 4,000 万ポンド (約 258 億円) と順調な実績を残している。留学生について、中国、インド、マレーシア、ナイジェリア、米国の市場を重要視している。全学生の 25% は英国以外からの留学生、教職員の 26% は英国以外から採用、研究費の 11% は英国外からのファンドで構成されており、既にかなり国際性の高い大学である。



国際課業務

Fiona Brown, Head of International Office

Leading an International Office and overview of International Admissions

国際課課長のフィオナ・ブラウン氏より、「国際課」(International Office: IO)の構成と業務について説明が行われた。「国際課」の役割は、国内外の様々な教育機関 (Centre, Schools, Facilities) と提携を結び、連携して広く人材をリクルートすることである。



「国際課」には 2 つのチーム「留学生リクルート」(International Recruitment) と「国際化推進」(International Development: ID) があり、相互に協力しながら業務を遂行している。その業務は多岐にわたり、国外の協定校を訪問 (毎年 43 の国と地域を 70 回ほど)、ブリティッシュ・カウンシルなどが行っている留学フェアに参加、厳選した 30 ほどの留学エージェントと契約してプロモーションを行うなどが含まれる。「国際化推進」チームは、海外留学、企業とのスポンサー契約、教育機関との協定締結、奨学金、留学生の受け入れなどに関する業務を担っている。留学希望者への対応では、大学のウェブサイトやインターネットの活用とともに、個別化と対話に力を入れており、たとえば、オンラインを活用した問い合わせシステムの開発、2 月から 7 月に実施する電話キャンペーン、マンチェスター大学の学生による説明などを行っている。なお、「国際課」は、「入学課」(Admissions Team) とは別の独立した組織であり、入学許可に関する最終的な決定はマンチェスター大学の各学部で行われる。

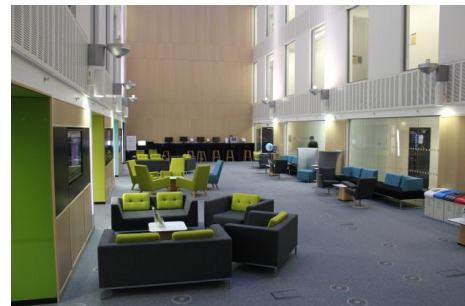
学生生活支援

Jenny Wragge, Student Experience and Evaluation Manager and Emily McKintosh, Student Support Advice & Guidance Manager

The Directorate for the Student Experience Division (DSE) とは入試、学生リクルート、学生生活、教育サポート、寮、自己啓発・学生コミュニティ、を担当する部署である。学生が入学してから卒業するまでの世話をを行う部であり、30,000 人の学生登録、12,000 人の卒業生のために 57 のセレモニーを行う。150 以上の国から留学生をリクルートし、学部学生の 7,000 人の卒



して毎年 60,000 人の申請がある。学生寮では 8,500 人分の部屋を管理しており、すべての留学生の入寮が保障されている。カウンセリングサービスでは約 4,000 人の学生が登録されており、サービスを利用している。DSE では学生の申請件数、学生満足度、学生の就職率の 3 つの指標を重要視している。学生の申請件数は毎年目標値を設定し、学生の満足度については毎年 2% の増加で 2020 年までに 90% に達することを目標としており、学生の就職という点では、2020 年までに HESA(英国高等教育統計局)が毎年実施している Destinations of Leavers from Higher Education (DLHE)で、卒業後に就職・進学をする学生の割合を 85% に向上させることを目指している。



アトリウムとは、平日 9 時から 17 時まで開いている学生用スペースで、キャリア・サポート、インターナショナルプログラム、インフォメーションアドバイsteam が学生をサポートしている。学生のあらゆる相談に応じられるチームが一カ所に駐在しているので、学生が何かで悩んでいたらワンストップで全ての悩みを解決できる場所となっている。真剣な悩みを聞く 1 対 1 用の部屋から、試験勉強等ができるオープンスペースまであり、広く学生に利用されている。

キャンパス・ツアー

午前の部の終了後、ランチ会場までの道のり、キャンパス・ツアーが行われた。まず、研修が行われたラザフォード・ルーム(Rutherford Room)は、放射性元素変換説を提唱した物理学者アーネスト・ラザフォード(Ernest Rutherford)が 1907 年から 1919 年まで研究を行っていた場所である。次に訪れたのは、マンチェスター大学附属博物館で、エントランスには大きな熊の剥製や恐竜の骨格標本が展示されており、ミュージアム・ショップも併設されていた。訪問時はシベリア特別展が行われていたが、残念ながら館内を閲覧することはできなかった。マンチェスター大学は、この博物館の他にも、英国水彩画のコレクションを誇るウィットワース美術館(Whitworth Art Gallery)を併設している。こうした形で大学が知の創造・蓄積・公開に貢献しているのは非常に興味深かった。キャンパスは、古い伝統的な建造物と新しい近代的な建造物が見事に調和している様子が印象的であった。たとえば、400 万冊以上の蔵書を誇る英国で 3 番目に大きいとされる図書館の向かいにガラス張りのラーニング・コモンズ(Learning Commons)という学習スペースが設けられていた。ランチ会場のクリスティー・ビルディング(Christie Building)は、1890 年代に建設された図書館で、その一部を改修し、ビストロを併設していた。美しいステンドグラスと無数の書籍に囲まれた場所でのランチは、マンチェスター大学の長い歴史と豊かな学識を感じさせてくれる特別な時間となった。



4. 報告者所感

世界トップ 25 の研究型大学になることを目標とし、全ての戦略がこれに基づいており、目標が明確な大学である。政府からの運営費が削減されている中、留学生から徴収する経費を 10 年間で 3 倍に増加させるなど、大学経営が大変優れた大学であると感じた。また、在籍学生の満足度が低いことや、癌研究や生物工学など自学で評価の高い研究分野を良く分析している。印象的なスクールカラーや英国で最も大きい留学生リクルーターチームを活用し、大学のブランド力の強化に尽力しているように感じた。

(報告担当: 上田 純平、日笠 誠、伊藤 壺、星 久美子)



1. 大学の概略

ブラッドフォード大学はイングランド北部のウェスト・ヨークシャー州ブラッドフォードにある国立大学。学部で約 12,750 名、大学院で約 2,250 名の合計約 15,000 名の学生が、本学で学んでいる。



ブラッドフォード大学は 1822 年、Bradford Technical College として創設し、現在 Faculty は、Faculty of Engineering & Informatics, Faculty of Health Studies, Faculty of Life Sciences, Faculty of Management & Law, Faculty of Social Sciences の 5 つで構成されている。中でも 多くの政治家、国連職員、NGO 職員を輩出する Faculty of Social Sciences は、世界的に高い評価を得ている。また、Faculty of Management & Law は 2013 年の Financial times でヨーロッパのトップ 50 のビジネス・スクールのひとつと評価された。

ブラッドフォード大学には 150 カ国以上から学生が留学している。また、ブラッドフォードの人口は 50 万人を超えるが、70 以上の言語が話されており、多様性に富んでいる。

また、ブラッドフォード大学は、約 1 億 2 千万ポンド(約 220 億円)かけ、2 キャンパスの設備整備や世界的なエコキャンパス整備を進めている。

2. 訪問スケジュール

※交通事情の影響で、スケジュールが後倒しになったため、キャンパス・ツアーは 5 分程度であった。

9:00 ブラッドフォード大学の紹介

9:15 ブラッドフォード大学のマーケティングと国際化

9:45 Q&A

10:00 ブラッドフォード大学の学生の留学と留学生のサポート

10:30 Q&A

10:45 ブリティッシュ・カウンシル、神戸大学、東京外国語大学、横浜国立大学による発表

11:30 キャンパス・ツアー

12:00 昼食会(閉会の辞)

3. 発表要旨

ブラッドフォード大学の紹介

Prof. Shirley Congdon, Pro-Vice Chancellor (Learning and Teaching)

Introduction to the University of Bradford

Learning and Teaching 担当の Shirley Congdon 副学長から、ブラッドフォード大学の概要について以下のとおりプレゼンテーションが行われた。

ブラッドフォード大学は、1822 年に設置された Bradford Technical College に始まり、1966 年に現在の形となった。2016 年で 50 周年を迎える。英国の大学としては初めて平和学分野の学位を創出し、また先進的なビジネス・スクールを設置した大学でもあり、英国の中でロンドン以外では初めてパートタイムの学位課程を提供した。

平和学や MBA の分野で優れた成果を挙げており、平和学や国際関係の研究のため多くの日本人留学生在が本学で勉強している。その他の分野では、工学やヘルスケアサイエンスの分野に強みを持っている。

本学では、21 世紀のグローバル社会、産業、ビジネスに対して「インパクト」を与えるような先進的で優れた研究を行う場として、学生を育成している。大学での研究によって得られ、発明され、蓄積された知識や技術を、地域社会や国際社会、産業、人類の福祉に還元し、最終的には持続可能な社会の実現を目指している。

169 カ国に約 112,000 人の同窓生が存在しており、たとえば、中国の国家開発銀行のチーフ・エコノミストやエチオピアの副首相など、様々な分野で活躍する人材を輩出してきた。エチオピアの副首相になった卒業生はかつて本学で平和学を専攻していた。平和学部門はこれまでアフリカにフィールドを置いた活動に数多く取り組み、当地での平和構築や地域の発展に関する研究を行ってきた。



Pro-Vice Chancellor, Shirley Congdon

本学には現在約 15,000 名の学生が在籍しており、そのうち 21%が EU を含む海外から留学してきている学生である。また、2013 年から 2014 年にかけて 5,000 人以上の在学生在がインドやシンガポール、マレーシア、オマーン、ドバイなどへの留学プログラムに参加している。これらの地域その他、日本を含めた他の地域の大学との効果的で強固な関係の構築を模索している。学外その他機関と連携した多くのプログラムも開発しており、たとえば、BBC と連携して学生のトレーニング・プログラムを設けてメディアの実施研修を行っている。また Ford, Intel, Morrison, Nissan などの産業界や NHS などの公的機関との強いパイプがあり、教育や研究の分野で協力を深めている。

「持続的発展」「持続可能性」をキーワードに、これらが社会や産業、ビジネスにどのような意味を持つのか、大学の研究や教育をどのように還元し、貢献させ、インパクトを与えていくのかということが重要だ。

ブラッドフォード大学は、約 1 億 2 千万ポンド(約 220 億円)の資金を投じて、優れた研究・教育施設を整備し、世界を牽引するエコキャンパスの構築を目指している。中でも、4,000 万ポンド(約 73 億円)を投じて作られ、2011 年にオープンした“The Green”と呼ばれる学生宿舎群(Student Village)はキャンパスの中心に位置し、ソーラーパワーや雨水等の自然エネルギーを利用した発電等により、低コストでエコフレンドリーな学生宿舎として、学生に快適で安全・安心な住環境を提供しており、世界の中でも卓越した学生宿舎として注目されている。英国で最も優れた“Best Student House”として表彰されている。また本学は世界で 4 番目に緑豊かでエコな大学であり、2020 年までに CO2 排出量を 50%削減する目標を掲げ、世界で最も持続可能な学生宿舎である“The Green”を中心に、持続的発展・持続可能性をビジネスや産業の分野へ応用するための取組み、先端的教育・研究を行っている。

大学にとってブラッドフォードという都市は大きな財産である。行政から財政的な支援は受けておらずあくまで独立しているが、重要なイベントや課題については行政や地域社会と連携し、子供への教育や医療等様々な分野で密に連携・協力して取り組んでいる。

ブラッドフォード大学のマーケティングと国際化

Mr Mark Garratt, Director of External Affairs

University Marketing and Internationalization

27 年間、35 カ国でマーケティングの経験のある Mark Garratt 氏から、ブラッドフォード大学のビジョン、マーケティング、国際的評価や国際的な活動、将来的な目標について、以下の通りプレゼンテーションが行われた。

ブラッドフォード大学は、産業革命の中心地となったイングランド中北部に位置し、全ての人々の繁栄のために、知識を生み出し、広め、適用する、世界的リーダーになるという使命がある。その 4 本柱は、優秀さ、国際化、包括性、持続可能性である。

我々の要となる戦略は、先進デジタル技術を活用したヘルスケア、工学・製造部門における技術革新、持続可能な社会の構築、の 3 つである。

External Affairs 部門は、学生のリクルート、国際連携、卒業生・同窓会、学内の芸術活動、マーケティング、入学審査、広報、行事関係の業務を担っている。External Affairs の目的は、ブラッドフォード大学が学術的優秀さとすばらしい研究を行う世界でも有数の Technology University であるという評判を高めることであり、重要なステークホルダーであるブラッドフォード大学の学生や職員、ブラッドフォードを目指す生徒や卒業生、パートナー、企業、政府機関や地域コミュニティとの関係を深め、ステークホルダーの大学への関わりを高めることである。上記の目的を達成するためには、コミュニケーションを深め、実効性を高め、ネットワークを深め、マーケットにあわせた手法を行い、理論に基づいた意思決定を行い、関係をコントロールし、多様性を高めることを目標とすべきである。



Mark Garratt 氏

今後、ブラッドフォード大学全体で共有できる一つの持続可能なブランドアイデンティティを確立すべきであると考えている。全ての主要なステークホルダーごとに適した関係を形成すべきであり、個々の事例ごとに適した方法を用いて機会を最適化すべきであり、そのためにはマトリックスを用いて、何が有効で何が有効でないかを分析することが効果的である。例えば、ターゲットごとに SNS や広告といったデジタルメディアを活用していくべきで、SNS ではとくに Facebook や LinkedIn が有効である。

ブラッドフォードを目指す生徒に対しては、ブラッドフォード大学を知ってもらうためにオープン・デイ、Education Liaison、Trans (サマースクール)を設けている。企業との連携では、夕食会、研究成果の共有、Ellen MacArthur Foundationなどを設けている。

国際化という側面では、学生の国際化とスタッフの国際化を目指していく。また、国外での教育機会の推進と戦略的パートナーシップを行っている。

ブラッドフォード大学はアメリカや南西アジアを含む世界中から多様な観点で学生を募集し、多様性に富んだ学生コミュニティを作り上げている。職員の多様性という点では、世界的な研究のつながり、外国人スタッフ、事務職員と教員の海外研修などを行っている。

海外での教育機会の推進という点については、2013 年から 2014 年にかけて、5,000 人以上の学生が留学しており、MBA では遠隔講義を行っている。また、ドバイでヘルス・マネジメントの授業を行っており、タンザニアで開発学の授業を行っている。

戦略的パートナーシップは、学長が、中国とインドを訪問し、ネットワークを強めている。また、国内でも UKTI (英国貿易投資総省 (UK Trade & Investment))、China-Britain, Business Council、外国公館、ブリティッシュ・カウンシルといったネットワークに加入し、関係を深めている。また、海外で同窓生レセプションや卒業式を行い、卒業生との関係も深めている。

将来的には外国人教員や研究者が働き、留学生が学びたいと思うような、国際的な Technology University になることを目指している。

ブラッドフォード大学の学生の留学と留学生のサポート

Nadira Mirza, Director of Student Success (プレゼンテーション)

Sue Baker, International Student Advisor

Claire Hunter, International Officer

Outbound Mobility and International Student Support



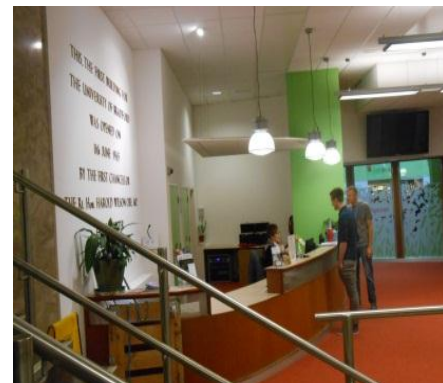
Nadira Mirza 氏

Mirza 氏が中心にプレゼンテーションをし、その後 Mirza 氏、Baker 氏、Hunter 氏との質疑応答。戦略上の目標として、①海外のパートナーシップ先との国際交流の機会を作ること、②世界経済におけるリーダーになるための準備を学生にさせること、の 2 点があげられた。

“Team Bradford”として様々な学生サポートに取り組んでいるが、入学者獲得段階も含む学生のプロセスとして 6 つの段階を置いている。1. やる気を育てる、2. 入学前アドバイス & ガイダンス、3. 入学、4. 1 年生での経験、5. プログラムを通じての成長、6. 就職、の 6 段階である。学修面での経験、社会的な経験、課外・正課を通じた経験などを通じ、学生は段階的に経験を深めていく。



留学生のサポートの一例として、留学生が入学する際の到着時サポートの具体例が紹介された。無料の空港出迎え、留学生のための情報ブース、スチューデントアンバサダー、オリエンテーション、英語サポート、個別チューター制、学修スキルアドバイザーなど。他、個別のケアとして、留学生のための学生アドバイザー、海外留学のコーディネーター、学生の主体的・積極的な授業参加などを推進するための担当者、宗教面でのアドバイザー、学友会、カウンセリングのサービスなど多数。英国に居住するという点で必要なサポートも行われ、例えばビザや在留については、ビザアドバイザー、定期開催のビザに関する情報交換会、法律関連のサポートチームもある。大学に溶け込んで大学生活を充実させるための企画も様々あり、月 1 回の日帰り旅行、国際的料理コンテスト、環境アンバサダー、130 以上のクラブ活動や団体など、先輩留学生を巻き込みながら様々な留学生サポートをしている。



Student Support Center

キャリア・就職支援においてはキャリア・ディベロップメント・サービスという在 student と卒業生のためのサポートが設置され、就職のためのフェア、レジュメの書き方や面接におけるノウハウ、英国内また海外における就職のためのデータベースを使うことができる。校友については卒業後の大学との繋がり、国際的な校友会やネットワーク、校友アンバサダー、国際的なイベントの実施例などが紹介された。

海外留学における人気の国・地域は、エラスムスなどの奨学金が出る国・地域、米国、香港の順に高く、日本は第 4 位。アジア圏を選ぶ学生も多く、韓国・マレーシアなどがこれらの次に人気が高い。学生は、短期プログラムや休暇を使った留学サポートを利用したり、エラスムス、世界的な留学奨学金を利用し海外へ留学する。希望者への情報提供、海外留学フェア、出発前のサポートに加え、“Drop-In Session” (<http://www.bradford.ac.uk/counselling/self-help/drop-in/>) という、誰かに会いたい時・情報が欲しい時・何か問題がある時、その他必要がある時にはいつでも受けることができるオンライン予約制のカウンセリングがあり、こちらのシステムを使った相談も可能。



ブラッドフォード大学は現在 150 カ国以上の留学生が在籍していることもあり、様々な観点から充実したサポートが行われていることが分かった。ブラッドフォード自体がモスクや中華系の建物が見えるなど異文化の混在した街であるが、宗教的な面での相談窓口があるなどの大学側のソフト面でのインフラ整備は大変参考になった。

昼食会（閉会の辞）

Mr. Bill McCarthy, Deputy Vice-Chancellor (Operations)

Closing Address

これまで英国保健省の事務総長や NHS(国民保健サービス)Yorkshire 州の最高責任者を務めるなど、医療・社会保障政策立案に携わってきた Bill McCarthy 副学長は、2014 年 7 月にブラッドフォード大学の副学長に就任した。

昼食会には午前のプレゼンテーションで説明を行った職員その他、ブラッドフォード大学で働く教職員も同席し、日本の Delegation との交流を深めた。

ブラッドフォード大学は 2016 年に創立 50 周年を迎える。質の高い研究・教育を行ってきた長い歴史を持つ伝統ある大学である。当校の成功の鍵は国際舞台におけるビジネスや世界の大企業・機関との強固な結びつきである。世界の産業界との協同によって、ユニークな学位コースの開発や将来世界で活躍する人材の育成・能力の向上、学生の就職に結びついている。また、70 言語以上が話される国際的な多様性に富んだ都市であるブラッドフォードと大学とは様々な分野で連携している。

今後、日本の大学や学術機関、産業界とのネットワークを強化し、さらなる関係の発展を期待している。



Mr. Bill McCarthy, Deputy Vice-Chancellor

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

学生のサポートが多面的であること。留学生を受入れるにあたり、必要となるソフト面でのサポート、例えば宗教的な面からのサポートなどが取り入れられている点。留学生募集の前段階で必要なこれらのサポートは日本の大学ではまだまだ浸透していないと思う。今後、英国のみならず広く留学生を獲得する上で、必要な視点であると感じる。

また、EUより資金面での支援を受け、将来的にビジネス分野などでの活躍を目指す学生のための施設として、Re:centre が設置されたが、社会起業家を目指す、資金を獲得するためのビジネスプランの作成、セミナー・ワークショップなどへの参加など、産学が一体となって将来の産業界やビジネス界でのリーダーを育成するという取組みは日本もぜひ見習いたいと感じた。

有給の学生 Ambassador 制度を整え積極的に活用している。例えば、留学生の面倒を見る Ambassador の場合、毎年 9 月に選定を行うとのことであった。応募者は比較的多く、グループ面接を行い、その中で、様々な人(国籍、男女、積極的な人、温厚な人など)を採用する。多様性を持たせるのは、留学生の性格も様々なので、ぴったり合う人が見つかるようにするためとのことであった。

「持続可能性」「持続的発展」というキーワードをもとに、世界最大規模の平和学研究センター、産学連携の推進のために設立された Re:centre、世界で最も持続可能な学生宿舎である“The Green”という学生宿舎群など、自大学の特徴・強みをさらに延ばして、社会や産業にインパクトを与えていくという戦略が明確で、他大学との差別化や大学のアピールが効果的に図られているのがとても印象的だった。

5. 報告者所感

5 つの大学を同時に見る機会が与えられたため、ブラッドフォード大学と他大学を比較することで、それぞれの大学の強みや弱みがよく理解できた。ブラッドフォード大学において、特に強みとして感じたのは、学生向けサポートが広く行き届いている点である。実際に多くの国籍の学生が混在しているキャンパス内の様子を見学し、多面的な留学生サポートを必要とする大学であるだろうと実感したが、取組みの詳細を聞き、参考にできる部分が多くあった。学問分野では平和学と MBA が特に知られているが、「特定の分野で強い領域がある」とこと自体が留学生の獲得に直結していることを改めて感じた。他の 4 大学に比べ今後の発展を期待したいと感じた部分は、ブランディングの部分である。いくつかの大学はロゴや色の統一、形なども含め、大学のイメージづくりを行っている。一方、ブラッドフォード大学は資料やプレゼンテーションの PPT などでも、大学を示す統一されたロゴや色、大学の戦略を長期的に示すキーワードなどが見られなかった。その点では目指すべき大学の姿を全学で共有し、戦略的に大学運営を行うことの重要性を感じた。



Bradford は移民の 2 世代が多い地域であり、また、大学入学 first generation の受け入れも広くイングランドから積極的に行っており、そのため、開かれた大学作りに力を入れているとのことであった。

また、Bradford 市との連携も深めており、地域への貢献意識が高いと感じた。

学問的には、平和学や経営学の分野で高い評価を得ているが、もともと Bradford Technical College として始まった歴史を大切にし、キャンパスも技術を活かしエコフレンドリーかつ持続的な建築を心掛けているとの説明が印象的であった。

ブラッドフォード大学は今回訪問した 5 大学の中では学生数の上で最もコンパクトな大学だったが、明確な理念・ビジョンを掲げ、強い分野(ユニークな分野)をさ

らに強くしていくという姿勢・方向性が徹底していて、それは今回プレゼンを行った方々や昼食会の際に言葉を交わした方々の話からも、気持ちを 1 つにして大学をよいものにしていこうという熱意やエネルギーが感じ取れた。昼食会では日本からの



Delegationと同数、いやそれ以上の多くの教職員の方々に参加いただき、そのホスピタリティに感謝するとともに、日本の大学との今後の交流・連携の貴重な機会とするための意欲をとても強く感じた。

（報告担当:松尾 勇太、南 さやか、フナキ 明美）

1. 大学の概略

リーズ・ベケット大学は、英国中央部の大都市であるリーズ市内に位置し、英国内で最も大きな大学の 1 つである。28,000 人以上の学生が学び、100 ヶ国以上から 1,500 名以上の留学生を受け入れている。教職員数は約 2,900 人。1824 年に設立され 190 年の歴史を持ち、2014 年 9 月に大学の名称をリーズ・メトロポリタン大学 (Leeds Metropolitan University) からリーズ・ベケット大学に変更した。タイムズ紙の高等教育アワード賞等で、スポーツからビジネスまであらゆる領域で優れていると評価されている。卒業生の就職実績も優れている。



キャンパス

以下の 2 キャンパスで構成される。

- 1) シティ・キャンパス (City Campus)
- 2) ヘディングリー・キャンパス (Headingley Campus)

キャンパス間の距離は 2.5 km である。

ヘディングリー・キャンパスには、ワールドクラスのスポーツ施設であるヘディングリー・カーネギー・スタジアムがある。



* 24 時間 365 日開放されている図書館



* モダンな学生宿舎

学部、学生支援

以下の 4 学部で構成される。

- 1) 芸術・環境・科学技術学部 (Arts, Environment & Technology)
- 2) 経営・法学部 (Business & Law)
- 3) カーネギー (教育・環境・スポーツ) 学部 (Carnegie)
- 4) 健康・社会科学部 (Health & Social Sciences)

世界 170 大学 (イギリス国内 53 大学を含む。) を対象に評価した International Student Barometer, Autumn Wave 2013 では、クラス・サイズ部門でイギリス国内第 1 位、チューター制度部門でイギリス国内第 1 位 (世界第 4 位) にランクされており、99.5% の学生が大学の講義に満足している。

学生に就労体験 (アルバイト) を与える制度があり、年間トータルで 175,000 時間以上の仕事を紹介した実績を持つ。6,500 人



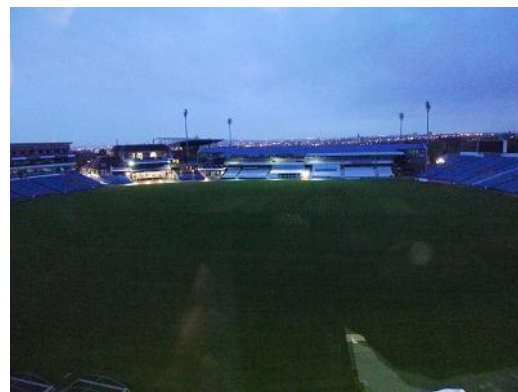
以上(全体の約 25%以上)の学生がパートタイムの仕事を経験している。ボランティア・プログラムは 200 名以上の学生にボランティアの機会を提供している。2012 年のロンドンオリンピックではイギリス国内の大学で最多の 70 名以上の学生をインターンシップとして派遣した実績がある。

同窓生の国際活動も盛んで、国際企業である Disney Channels EMEA, KPMG, Manchester United, Redmayne-Bentley, Connolly Europe Limited, 3M や Omerta Games Ltd.等への就職及びインターンシップの支援を行っている。

学年は 1 月または 9 月から始まる。留学生には無料の英語学習コースを提供しているほか、留学生全員に宿舎を保証している。

ヘディングリー・カーネギー・スタジアム(Headingley Carnegie Stadium)

大学が所有する世界的水準のスポーツ施設で、ヘディングリー・キャンパス中心部から約 1 km離れたところに位置する。ヘディングリー・キャンパスの一部である。陸上競技用トラック、クリケット場(2 万人収容、リーズ市と共同経営)、ラグビー場、プール、室内および屋外テニスコート、体操用センター、スポーツホール、スカッシュコート、クライミングウォール、ダンススタジオ、フィットネス・ルームを備えている。また、構内には、カフェ、レストラン、ショップ、書店、ATM もある。2012 年のロンドンオリンピックにおいて中国の陸上チームの調整拠点になった。また、2010 年に Carnegie Pavilion 等の建物は、Council for Global Architects によって Best Tall Building in the World に選出された。



(参考)リーズ市

リーズは、英国の中央部に位置する西ヨークシャー地方の中心都市である。人口は約 75 万人で、ロンドンから鉄道で 2 時間半のところにある。大都市であるが、市の中心部から車で 30 分走れば、牧草地に羊が群れる田舎の景色を十分に堪能できる。

2. 訪問スケジュール

14:00 到着の予定だったが交通事情により 30 分遅れて到着

14:30 キャンパス見学 1: ヘディングリー・キャンパス *Brief tour of Headingley Campus*

15:00 発表①国際ナショナルオフィスについて *Presentation on the International Office*

15:40 発表②就職支援について *Presentation on Employability*

16:00 カーネギー・パビリオン(大学所有のスポーツ施設の一部)へバスで移動 *Travel to Carnegie Pavilion (by coach)*

16:10 キャンパス見学 2: カーネギー・パビリオン及びヨークシャークリケット場 *Brief tour of Carnegie Pavilion and Yorkshire Cricket Ground*

16:30 発表③ブランディング戦略について *Presentation on Branding Strategy*

3. 発表要旨

国際ナショナルオフィスについて

Polly Tzortzi, Head of Undergraduate Service
International Office

国際ナショナルオフィスの役割



入学前:入学前から入学後まで一連の流れを一つのチームによって実施

1. マーケティング(ブランドの周知、問い合わせ内容の調査)
2. 学生募集(問い合わせ対応の徹底、出願から入学までのサポート)
3. 入学(入学に伴う手続き、ビザ手続き、入国時の出迎え)

入学後:英国学生と留学生の両方が共に活動する場を創出

交換留学、海外学習、ボランティア活動、国際社会ネットワーク活動



インターナショナルオフィスの体制

- 志願者の入学までの流れに合わせた対応(志願者の出身地域別に担当者が分かれている)
- 募集→入試→入学まで、シームレスなサービスの提供(同担当者が最初から最後まで受け持つ)
- 11名のスタッフからなるリクルートチームによる海外での周知、ブランド形成
- 学術スタッフの強力な関与(留学生の需要を常に意識し、学術スタッフと情報を常に共有する)

インターナショナルオフィスマネジメント

隔週で行われるマネジメントチーム会議にてマネジャーとディレクター間の情報共有。(部局を超えたオープンコミュニケーションにて最優先課題について話し合われる)

各マネジャー配下のチームは毎週会議を行う。(全てのスタッフにおける情報共有及びフィードバックの場合)

運用と戦略についてのアップデートが隔週で Vice-Chancellor(日本の大学における学長)が議長を務める CMT(Corporate Management Team)に送られる。

管理責任者にはマネージャズ・ツールキット(マネジメントに必要な能力に関するコース)の受講が必須。

全てのスタッフに対して様々な SD 研修を行う。

全スタッフによる匿名スタッフサーベイの結果分析による業務改善を実施。(90%以上の満足度を維持している)

		Markets	
		Existing	New
Products	Existing	Market Penetration	Market Development
	New	Product Development	Diversification

留学生リクルートメント戦略

英国政府、ブリティッシュ・カウンシル、企業等からの情報や社会の動向等、様々なデータの分析により、需要(生のニーズ)と供給(提供コース)について、現状と新たに必要となるものを把握する。

International Student Barometer という留学生調査を参考に、留学生の声に耳を傾ける。

学術スタッフによるパーソナルチューター制度を活用し全ての相談事のファーストコンタクトに応じる。(ISB “Personal Tutors”:UK1 位、世界 4 位)

社会で活躍するプロフェッショナルによる授業提供。(ISB “Expert Lecturers”:UK4 位、世界 5 位)

少人数制クラス。(ISB “Size of Classes”:UK1 位)



就職支援について

Peter Coates, Associate Director: Student Employability and Progression

Employability

学生に在学中に就労経験をさせることが重要で、それが実際の就職に繋がっている。大学戦略の中で就職は重点事項であり、大学として就職支援に対する長期的なビジョンを打ち出すことが必要である。

個人の能力は大きく分けて 8 要素(①知識(Knowledge)、②技術(Skills)、③経験(Experience)、④態度(Attitude)、⑤振る舞い(Behaviour)、⑥適応性(Adaptability)、⑦動機(Motivation)、⑧理解(Understanding))から成るが、これまでの就職対策では、①～③及び⑧をどう磨くかに重点を置かれてきた。しかし、これから重要なのは、④から⑦の要素であり、これらを磨くことが大切である。

大学の戦略は、「心を開いて、就職のドアを開く」ことである。学問で得た知識・技術を就職に活かせる技術にするには、3 つの歯車(積極性、広い視野、デジタル能力)を上手く回転させなければならない。

就職を成功させるためには、授業に就職対策を取り込み、キャリアサービス支援(職業紹介)を行い、また、実際に在学中に就労経験(インターンシップ等)をさせることが必要である。

3 分割モデル(Tri-Partite)を作成し、①学問の専門家(教員)、②就職の専門家、③雇用者(企業等)が連携して学生の就職支援を行っている。企業と関わっているのが大きな特徴である。学部すべてにおいて、3 分割モデルが機能しており、学生のニーズに合った支援を継続的にを行っている。各学部は責任を持って学生の就職支援を行っている。

93.7%の学生が卒業後 6 か月以内に就職または進学のどちらかに進んでいる。2014 年の就職または進学の割合は前年度比で 2.8%増加しており、大学の戦略が間違っていないことが証明されている。

就職戦略は 5 ヶ年計画であり、今後も学生一人一人の記録を取りながら適切に学生の就職に関わっていく体制を継続していく方針である。就職戦略では 6 つの要素(Faculty, Learning & Teaching, Enterprise, Student Union, Employers, Volunteering)の関連を重要視し、就職支援の最先端を進む大学を目指している。

ブランディング戦略

Deborah Green, Director of Corporate Marketing & Communications

Branding Strategies

リーズ・ベケット大学は 2014 年 9 月 22 日にリーズ・メトロポリタン大学より名称変更を実施した。この名称変更のタイミングに合わせ、ブランドの再構築を行っている。リーズ・ベケット大学にて行われたブランドの再構築に関し、マーケティング部門の責任者より説明を受けた。

ブランディング案の制作過程

ブランディング案の制作作業は、リーズ・ベケット大学を良く知るエージェントではなく、まっさらな状態から大学を見ることが出来るエージェントとしてタイム・ワーナー社を選択し実施した。過程は以下の通り。

1st Step

- ・ワークショップの実施やエビデンスの収集により、大学の強み、弱み、特徴に関する大学内の情報を集約
- ・独自性の検証
- ・内部の検証作業をスタッフ、学生、管理職、理事会という 4 つのグループに分けて実施。(様々なキーワードが出てきたが相互のグループの反応が一致していることを確認。)



2nd Step

それぞれのグループから「フレンドリーな雰囲気の中で役に立つ知識を身につけ、リーズ市に位置するというメリットを活かした幅広く国際的な教育を受けることができ、様々な経験をし、勤勉性が身につけ、就職力を備えることができる」という結果が出たことから、この内容をキーとして以下を作成した。尚、その際、重要視したのは、1) 無理に唯一性を創出するのではなく差別化できる部分を強調 2) 就職力に焦点を当てる 3) 真実に忠実に という点である。

エレベーターピッチ（簡潔な大学説明）

“Together we nurture the abilities that shape a lifetime, abilities that make us all ready for work, ready for life and ready to seize the opportunities that lie ahead.”

ストラップライン（ブランドに付随される記憶に残るスローガン）：“Opening Minds. Opening Doors”

エレベーターピッチならびにストラップラインを基に、文言のトーン、枢要値、心構え・行動指針（[例] 文言のトーン：IMAGINATIVE／枢要値：Inspiring & Creative／心構え・行動指針：THINK BIG, THINK DIFFERENT）を設定。尚、マーケティングの手法は従来の大学の方法ではなく、コカコーラ、アマゾン、e-bay といったグローバル企業と同様の手法を採用している。

3rd Step

リーズ・ベケット大学は大規模な大学であり、それに相応する大量で様々なコミュニケーションの階層、ステークホルダーならびに顧客との接触ポイントがある。この状況下において、意味のある物語性とスタッフ用の効果的なツールをいかに作成するかが課題であった。課題を解決するため、メッセージ・マトリクスを作成。メッセージ・マトリクスはスタッフ、学生、パートナーといった異なる対象毎に、項目別に伝えるべき内容をマトリクス化したもので、これにより、それぞれの対象が同じコンセプトのもと、同じストーリーを語れる環境を整えた。

ロゴ・デザインの統一化

ロゴ、カラーを統一化し、媒体のデザインもこれらに併せ、種類・用途毎のデザインを規定した。これらを徹底的に統一化するための厳格なガイドラインを作成し、キャンパスデザイン、紙媒体、WEB 等をこれに伴い整備を進めている。スクールカラーの紫に関しては紙媒体用、パワーポイント用、WEB 用にそれぞれにカラーコードを設定し、異なる媒体・機材であっても同一のイメージを伝えられるようになっている。またサブ・カラーとして年代毎、ステークホルダー毎など様々な観点から、好む色に関する調査を進め、対象毎に使用する色の設定を行っている（例：学部生用は明るい色）。また各種媒体に使用する写真に関しても、個人に焦点を当てる際のコンセプト、抽象的な写真を利用する際のコンセプトを規定するなど、使用目的毎に詳細のガイドラインを設定し、イメージの統一化、メッセージ伝達性の強化を図っている。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み

入学前から入学後まで一連の流れを1部署で実施し、1留学生に対し同じ担当者が全てを受け持つ体制を築いており、留学生が安心して学生生活に入ることが出来る環境を整えている。また、留学生の声から世界の政治情勢まで、幅広いデータによるグローバルマーケットの分析に努めており、現状把握から、先を見据えた視野まで、とても効率的かつ戦略的な留学生募集とサービス提供を行っている。

企業等の雇用者側を巻き込み、卒業後に必要な技術の提供、学生のニーズとのマッチングを効率的に成し遂げている。

全スタッフによる情報共有、様々なSD研修、サーベイによる業務改善等、スタッフの大学との関わり方に置いて意識を高める工夫が多く見られる。ブランディング面では、色遣いのもたらす心理的效果の利用、印刷物の表題デザイン統制による大学に所属するという団結感の発信、メッセージ性を考え抜かれた広報写真の利用等、徹底したブランディング戦略により、外側からのイメージアップだけでなく、内側からの関係者としての団結力やプライドの創出にも繋げている。

5. 報告者所感

リーズ・ベケット大学は歴史ある教育型総合大学として、実践的な学びや課外活動を通して就職力 (Employability) を高めることに注力し、大学全体が同じ方向性に向かって動いている様子が感じられた。今回、訪問したヘディングリー・キャンパスは歴史ある建物が立ち並ぶ広大なキャンパスに、掲示板やフラッグ等、様々なものがスクールカラーである紫で彩られ、統一感が演出されていた。

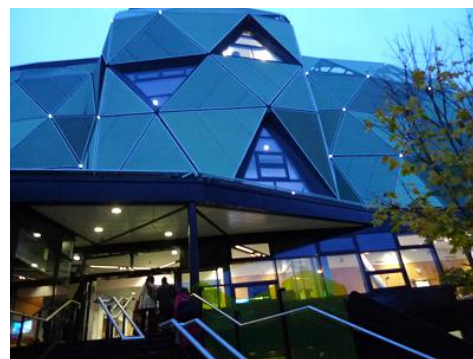


* 各所にスクールカラーの紫が使われた統一感のあるキャンパス

過去、様々な学校と統合を繰り返し、学生数が 28,000 名という英国最大規模の大学でありながら、1 つの大学であるという統一感をデザインの面からだけでなく、教職員の意識自体も、ブランディングの作業を通し、創出できている大学であると感じられた。

また外国からの留学生の取り扱いにおいても、「広報活動→学生募集→入学→入学後の各種サポート」という一連の流れを 1 つの部署で行うなど、顧客目線で学生サービスを行っている点から、「Customer Service Excellence (CSE)」(英国大学では 2 校のみが保有) に選出されている大学である所以が感じられた。この取り組みは留学生数を拡大している日本の大学においても組織体制の再構築の際には一考に値する施策であると感じる。

ヘディングリー・キャンパス内にあるカーネギー・パビリオンにはモダンな建物にヨークシャーのクリケットチームが本拠地として使用している大規模なスタジアムが併設されており、自治体との強い結びつきが感じられた。



* モダンな建物にクリケットスタジアムが併設されたカーネギー・パビリオン

今回のリーズ・ベケット大学の訪問は半日足らずと時間が多くは無かったため、質疑応答の時間が十分に取れず残念であったが、教育に特化した英国の大学を視察できたことは大変有意義であった。

(報告担当: 西川 奈津美、江口 幸史、渡辺 幹博)



1. 大学の概略

ヨーク大学はイングランド北部ヨークシャー州に 1963 年に設立された研究型大学であり、英国の大規模研究大学 24 校で構成されるラッセル・グループに属している。学生数 230 名で創立されて以来、急速に拡大を続け、現在、学生数は 16,000 名で、このうち 2 割が英国外からの留学生である。また、教職員数は 3,200 名にのぼり、教員のうち 4 割が英国外からの採用である。

教育・研究の水準は高く評価されており、タイムズ世界大学ランキング(2014 年版)では 113 位に位置し、設立から 50 年未満の世界大学ランキング(2013 年版)では世界 7 位に入っている。研究面では、Research Assessment Exercise (2008) では、159 校中 8 位と研究で高い評価を得ている。また、教育の質においても、Quality Assurance Agency (QAA) (2012)において優良な評価を得ている。

キャンパスは、起源をローマ時代にさかのぼる美しい中世都市であるヨークに所在し、Heslington のメインキャンパスには、200 エーカーを超える緑地庭園の敷地に、湖を囲んでカレッジ、アカデミックオフィス、学生寮、課外活動施設が配置されている。街中心部には King's Manor キャンパスがある。



2. 訪問スケジュール

- 10:00 副学長のウェルカムスピーチ
- 10:30 国際戦略、国際室の運営、構成、運営
- 11:30 学生の国際化について: アドミッションポリシー、海外への流動性、同窓会ネットワーク
- 12:00 海外パートナーとの協定の確立について
- 13:45 日本の大学の参加者によるプレゼンテーション
(①ブリティッシュ・カウンシルより日本の大学国際化施策の概要について②一橋大学③京都大学④信州大学⑤東北大学)
- 14:30 ヨークプログラムについて
- 15:30 ブランディング、レピュテーション(評判)管理と広報
- 16:10 留学生支援について: 住居、学習支援、カウンセリングサービス

3. 発表要旨

副学長のウェルカムスピーチ

Professor Deborah Smith, Pro-Vice-Chancellor for Research

Welcome to York

副学長(研究担当)の Professor Deborah Smith より歓迎と共に、大学の近年の取り組みを中心に大学の紹介があった。ヨーク大学は過去 10 年間に学生数もキャンパス面積も 2 倍に増やし、教員数も 2006 年以來新たに 200 名の教授を採用するなど多大な投資を行い、拡張してきた。

ヨーク大学では、2014 年 1 月に就任した学長のもと大学戦略を掲げ、①Move to faculty structure、② Teaching pedagogy、③ Improving student experience、④Establishing interdisciplinary research themes、⑤Creation of Graduate Research School の 5 つを主題テーマとしている。教育面では、29 学部を 3 つのアカデミック・クラスター (Sciences、Social Sciences、Arts and Humanities) へ集約・再編成する予定である。

研究面では、7 つのテーマ (Creativity; Culture and Communication; Environmental Sustainability and Resilience; Health and Wellbeing; Justice and Equality; Risk, Evidence and Decision Making; Technologies for the Future) を選定し、学際研究を促すことで、研究力の向上を図っている。訪問時は、各テーマにリーダーを決めている過程とのことで、研究力やリーダーシップを兼ねそろえた人物を民主的な方法で決める予定とのことだった。

また世界の大学との連携については、持続可能で、重層的な関係性もつこと、特に研究での連携につながる大学との関係を重視している。重層的というのは、相手大学と研究面の連携、学生交換、教育連携、職員交流等、一つの大学と複数分野でのコラボレーションを行うことを重視しているとのことである。

国際戦略、国際室の運営、構成、運営

Hilary Layton, Director of Internationalisation

Development and implementation of international strategy and running an international office: structure, day-to-day management

国際戦略について

ヨーク大学では、国際戦略として、以下の3つ目標を掲げ、国際化を推進している。

・Academic endeavour (学術面での国際化推進)

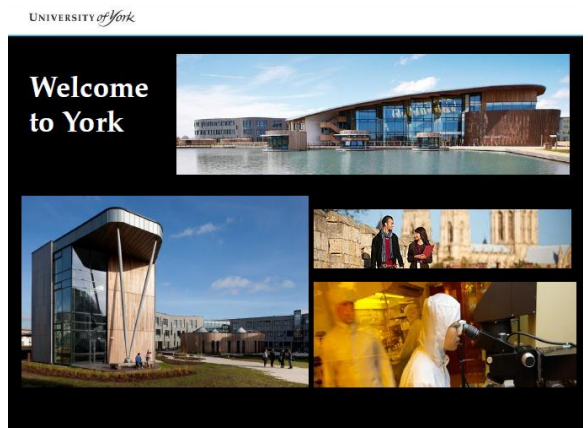
学術面で強い分野における国際的な研究教育活動の推進、国際的な視野を広げるための学生への多様な機会提供、外国人研究者、留学生にとって魅力的な研究教育環境の実現など

・Building reputation (レピュテーション(評判)の構築)

ヨークブランドの世界規模での認知度の向上、戦略的な組織連携と研究ネットワークの構築、海外の同窓会組織との連携強化など

・Internationalisation at home (大学キャンパスにおける国際化推進)

キャンパスいながら国際交流活動ができる環境の整備充実、国際戦略の教職員、学生への周知徹底、目標達成のための効果的なモニタリングシステムの構築など





国際室について

国際室は、17 人のスタッフで構成されており、グローバルパートナーシップチームとグローバルプログラムチームから成る。グローバルパートナーシップチームは、スタッフ 4 人で、交流協定の締結や戦略的な国際連携の企画立案を行っている。グローバルプログラムチームは、スタッフ 13 人で、交換留学やサマースクール、短期留学など、学生の海外派遣や留学生受け入れに関する全ての国際交流プログラム運営を行っている。

ヨーク大学では、2009 年に事務組織の再編が行われた。当時、国際関係は対外関係部署(External relations)が担当していた。100 人規模の大きな組織で、留学生のリクルートメント、ファンドレイジング、出版、広報活動など、多岐にわたる業務を行っていた。しかし、リクルートメントの業務量が非常に大きな負担になっていたため、この業務を別部門にするとともに、国際関係を担当する部署のあり方について議論が行われ、現在の国際室が新設された。

国際部のスタッフは、そのほとんどが大使館等の外交機関や国際機関での職務経験者や海外留学の経験者である。また、エラスムス計画による学生インターンシップも受け入れている。国際経験豊富なスタッフがいることで対外交渉が非常に円滑に行われており、また、留学を志望する学生に対しても適切なアドバイスができる体制が整っている。

学生の国際化について: アドミッションポリシー、海外への流動性、同窓会ネットワーク *Internationalising the student body: Admissions policies, outbound mobility and alumni networks*

ヨーク大学の留学生の採用について

Gwion Sims, International Student Recruitment East Asia

ヨーク大学では、以下の 3 点により入学審査を行っている。

- 学部 – A レベルや国際バカロレアの点数等(留学生についてはこれとは別に国ごとの基準がある。)
大学院 – Honors Degree (優秀学士学位) が 1~2.1 まで。(2.2 なら勤労経験が必要となる。)
- 英語力: IELTS のスコア。大半のコースは IELTS 6.5 以上。
- 特定のコースでは、志望動機書の提出や、面接の実施等。

留学生の採用については、国際リクルートメントチームが担当している。チームにはマネジャーのもと、各地域担当のスタッフが 6 名いる。スタッフは担当地域ごとに、各国の留学フェア等への参加計画や、大学への訪問計画等を策定し、留学生の採用活動を推進していく。また、各スタッフはそれぞれ担当の学部が決まっており、担当する学部の留学生採用計画等にも携わっていく。

ヨーク大学における国際的な流動性の重要性について

Allison Burson, International Relations Officer

学生にとって海外留学をすることは、国際感覚の構築、学問機会の拡大、汎用性の醸成、国際的なネットワークの構築等、様々なメリットがある一方で、言葉の問題、経済的な問題等のデメリットもあり、留学の阻害要因となっている。大学ではそれらのデメリットを軽減するために、様々な取り組みを行っている。

ヨーク大学では年間 200 名程度の学生が学期や年度単位の期間での海外留学を行い、50~100 名程度の学生がサマープログラム等の短期間の留学を行っている。一方、海外からは 150 名程度の留学生がヨーク大学に交換留学でやって来る。

ヨーク大学の学生が海外留学を行う機会としては、エラスムス計画によるものや、協定校との交換留学、サマープログラム等による短期留学がある。サマープログラムについては、昨年度はケープタウンや北京への訪問プログラムを実施したほか、今年度は、米国、ブラジル、ケープタウンへの訪問プログラムを実施した。



一方、海外の学生をヨーク大学に招く様々な種類の短期留学プログラムも実施しており、年間 400 名程度の参加者（うち、200 名程度は日本からの参加者）がある。これらの短期留学プログラムは、ホスト側のヨーク大学の学生にとっても、留学生と交流をする良い機会となっている。

留学に対する資金援助については、エラスムス計画による奨学金、Santander の奨学金、同窓会の奨学金等がある。また奨学金以外の留学に対する援助として、出発前のオリエンテーション、言語トレーニング、キャリアに関するアドバイス等を行っている。

同窓会ネットワークについて

Mary Haworth, Director of Development and Alumni Relations Office

ヨーク大学の同窓会である University of York Alumni Association (YAA) の会員数は、約 102,000 人で、20% が留学生で、25% が 30 歳以下となっている。

同窓会は大学のために、学生に対する支援、学生獲得のための支援、卒業生のキャリア・サポート等を行っている。また、学生は同窓会より、キャリア等の各種相談、同窓会主催のネットワーキングイベントへの参加、様々な活動に対する資金援助等により、メリットを享受している。

大学は、海外にいる同窓生を大学のアンバサダーとして任命し、現地の学校や留学フェア等における講演等、留学生を獲得するための各種活動を依頼しているほか、ヨーク大学から海外の大学へ留学している学生に対するキャリア相談の実施等、様々なサポートを依頼している。

海外パートナーとの協定の確立について

Establishing Agreement with oversea partners

MOU と研究ネットワークについて

Karl Ward, Global Partnerships Officer

ヨーク大学は専攻レベルでの協定は多数あるが、大学レベルの包括協定は、慎重に選んで締結しているため、大学のサイズに比較して少なく 12 校しかない。一つの研究分野から、専攻レベル、大学レベルの協定への拡大することもあり、個々の専攻レベルの協定をボトムアップで大学レベルの協定にする場合は、International Relations Department がどのように拡大する可能性のある協定か等をチェックし、根拠となるデータを収集し、承認するかどうかの判断するための情報提供を行っている。大学レベルの協定は署名者である副学長レベルの承認が必要となる。また、現在加盟している下記の研究大学のネットワークとの Student Mobility などのコラボレーションも強化している。

- Worldwide Universities Network（アメリカ、オセアニア、イギリス、中国、南アなどの18大学が加盟）
- White Rose Consortium（リーズ大学、シェフィールド大学、ヨーク大学が1997年に設立）
- N8 Research Partnership（イングランド北部の研究型8大学のネットワーク）
- Russell Group（イギリスの大規模研究型大学のネットワークで24大学が加盟）

Teaching Collaboration

Juliet James, Quality Support Officer

英国内及び英国以外の他大学との連携教育（ジョイントディグリーやダブルディグリー）は、主要な戦略の 1 つと位置付けられるが、ヨーク大学で多くの交流を行っているにもかかわらず、現在行っている連携教育は、ヨーク大学の他オランダ、スペイン、ハンガリーの 4 機関で実施している①Erasmus Mundus joint masters と、現在協議中の②オーフス大学（デンマーク）との Joint PhD の 2 種類しかない。この理由はヨーク大学が他の大学と比べ、比較的新しく小さい大学で、海外キャンパスなどを展



開していないことや学内の保守的な雰囲気が強くとジョイントディグリー等の連携教育は、ハイリスクでハイコストであるという考えが強かったためである。新しく就任した副学長の戦略のもと国際連携の重要性も増しており、ここ 2~3 年で変わってくるだろう。

連携教育の承認プロセスには、①Initial approval と②Full approval の 2 段階あり、これは相手大学が英国の大学でも英国外の大学でも、トップダウンで実施するものでもボトムアップのものでも同様である。Initial approval では、実施を約束するものではなく副学長 (Pro Vice Chancellor) のサインで承認となる。その後、様々な角度 (教育面、財政面など) からの検討を行う。Full approval では university committee の承認が必要となってくる。他大学と連携して教育を行うことは学期の違いや単位互換などの調整が難しい。

交流協定について

Sarah Leach, Centre for Global Program Manager

交流協定を締結する目的は、授業料を免除し、学生が海外留学をするのにかかる多額の経費負担の軽減にある。ヨーク大学には大学レベルの学生交換協定は 18 校あり、1 校あたり 2-4 名の学生を各校に派遣出来る。加えて多くの専攻レベルの協定 (エラスムス協定を含む) があるが、エラスムスプロセスが 2014-20 年でサードフェーズ (Erasmus+) に入るため、協定の見直しを行い、専攻レベルの協定を、100 校程度とした。しかし、専攻がどうしても継続したいという協定は、交換学生が正規学生になる可能性なども考慮し、継続してもよいことにした。ヨーク大学としては学生のため、学期あるいは年単位の派遣を増やしたい。学生が派遣先で学期・年単位の受入先が見つけれない場合は、サマースクールに派遣していて、ソウル国立大学、香港中文大学などが学生に人気がある。協定の期間ごとに評価するので、学生の派遣先の確保のため、米国の協定校とはよい関係を保つ必要がある。特に Penn State は 30 名程度の学生から申し込みがあり人気が高い。

ヨークプログラムについて

Matt Smelt-Webb, Head of York Course, Jenny Oxley, International Relations Officer

Summer programmes

ヨーク大学では、2014 年には 24 グループ (440 名) を 1 週間から 13 週間の期間で年間を通して受け入れている。学生対象の特注プログラム (Bespoke Program) ではビジネス等の特定テーマで、東北大学、香港中文大学、浙江大学、北京大学、エコーポリテクなどから受け入れている。その他、大学職員の研修も行っており、立命館大学から 1 週間、4 名ほど受け入れている。内容は、国際化についてのディスカッション、英語のコミュニケーションスキル、ヨーク大学職員のシャドーイング、プレゼンテーションである。

ヨークの学生の留学に関しては、学生の海外経験を増やすことが大学の課題である。現在学生の 4% の参加だが、これを 20% に増やすことを目指しており、留学フェアや経験者の講演会などの宣伝活動を行っている。大学主催の留学プログラムは 2011 年以来、米国 (カリフォルニア)、南アフリカ共和国、ブラジル、中国 (北京) において行っている。ヨーク主催の短期プログラムの他、エラスムス、交換留学、インターンシップ、サマースクール等の紹介などを行っている。留学や異文化経験は、多様性の理解や問題解決力などを醸成する機会となり、英国では就職で非常に評価されるという。

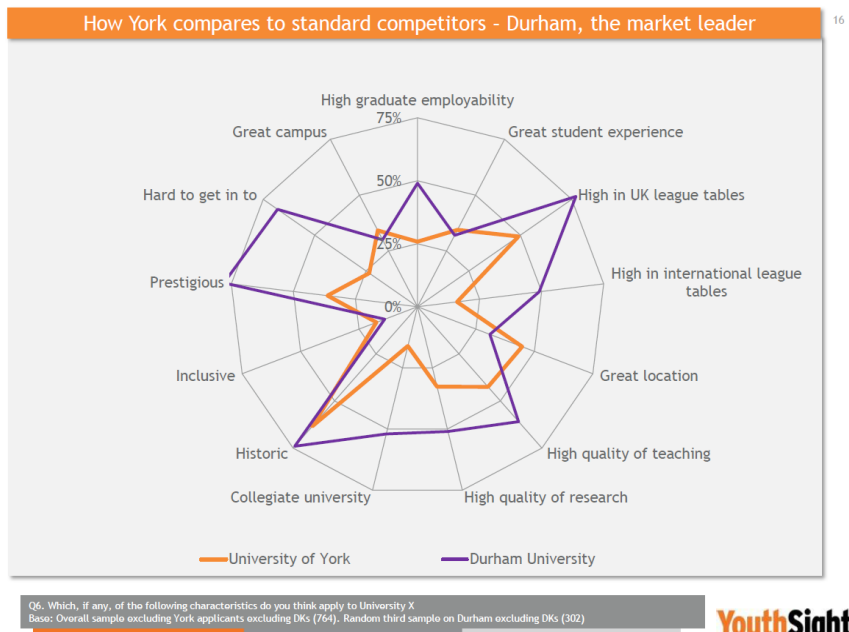
ブランディング、レピュテーション (評判) 管理と広報

Alison Kerwin, Head of Digital Marketing

University branding, reputation management and PR

マーケティングに関しては、ヨーク大学では、自大学のブランドを分析、定義を行っている。他のライバル大学(ダーラム大学等)をベンチマークしており、比較のダイアグラムを作成し、優位性の低いところを戦略的に高める施策をとっている。レピュテーション向上には、ソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)の活用が有効であると考えている。特にTwitterに注目しており、6名交替で毎日Twitterをモニターし、苦情等の対応を行っているとのことだ。

卒業生については、ネットワークを保持することが非常に重要であり、Linked-inや卒業生用のポータルを作り、大学との繋がりを保ってもらえるよう工夫をしている。米国拠点の同窓会組織では、米国に留学する学生への奨学金を新設した。シンガポールでは新入学生のリクルーティングに卒業生が活躍している。クラウドファンディングのシステムを使い、学生が自由にプロジェクトを立ち上げ、卒業生をはじめとした外部のサポートを得られる仕組みづくりも、英国の他大学に先駆けて行っている。就職課では、卒業生と学生を結びつけるメンター制度を運用している。



留学生支援について: 住居、学習支援、カウンセリングサービス

Support for international students: Accommodation, learning support, counseling

Centre for English Language Teaching(CELT)について

Paul Roberts, Director of the Centre for English Language Teaching

CELT は、英語を母国語としない学生に対してのみならず、全ての学生に対し、レベルや学習内容に応じて、様々な英語学習のコースやワークショップの実施、学生とのマンツーマン相談等を実施している。

英語学習コースについては、主に学期開始前のコース(Pre-Sessional Courses)と学期期間中のコース(In-Sessional Courses)とに大別される。前者は主に、英語力が足りない留学生向けの英語学習のためのコースとなっている。後者は、専門的な学問内容を読み書きするための英語を学習するためのコースで、英語に不自由のある学生に対してのみならず、あらゆる学生を対象としたコースとなっている。

学生支援について

Louise Saunderson, International Student Support Co-ordinator

大学が行っている学生支援は、主に以下のとおり分類される。

① 留学生支援、②入国アドバイス、③生活アドバイス、④経済支援、⑤メンタルサポート、⑥障がい者支援

この他、学生団体による支援、ヘルスケアサポート、宗教的な設備等の支援がある。

住居について

Margaret Kuby, Accommodation Manger



寮に関して、シングルルームの部屋への入居を希望する1年生と留学生には、100%の入寮保証がある。

2014/2015年度の1年生のルームタイプ別の入寮実績については、以下のとおりである。

- ・バスルーム付き:44% 無し:56%
- ・入寮期間 36週間:16% 40週間:82% 51週間:2%
- ・賄い付き:26% 無し:74%

家賃はスタンダードルームの場合、2015/2016年度については1週間につき、バスルーム付きが139.23ポンド(約26,000円)、無しが121.94ポンド(約22,000円)とのことである。

寮は、場所や設備等を含め様々なタイプの部屋があるが、学生の希望や様々な事情を考慮したうえで、大学が割り当てを行う。また、大学で民間の住居の斡旋も行っている。

Open Door Team について

Steven Hardy, Practitioner-Open Door Team

Open Door Team とは、メンタル面で問題を抱える学生のためのサポートチームで、7名のスタッフがいる。スタッフは単なる学生相談員のような存在ではなく、メンタルサポートに関する専門家とのことである。

チームが行っているサポート内容は、特定の問題に対して最大3回までの支援や、専門機関への橋渡し、カウンセリングや治療の実施、ケースマネジメント、ワークショップの実施等、多岐にわたる。

学習支援について

Madeleine Morgan, The Writing Centre Manager, Learning Enhancement Team

大学では地域の高校等に対して様々な学習支援を行っているほか、在学生に対して以下のような支援を行っている。

- ・The Writing Centre

センターでは学生が論文等を執筆するにあたり、専門のチューターと議論を行う場を提供している。また、センターは学部と共催で、論文執筆テクニック上達のためのプログラム等を開催している。

- ・Maths Skills Centre

センターでは、学生の数学学習の支援を行っている。センターには数学や統計学に関する参考書やコンピューターが設置されているほか、学習スペースがあり、自由に使用することができる。また、学生は数学や統計学に関する問題について、専門のチューターに予約制で相談をすることができる。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

「国際化」の取組み

ヨーク大学だけではないが、どの大学も留学生の獲得のためにエージェントを積極的に利用している。例えば、今回訪問したどの大学もエージェントが作成した日本語のホームページを持っていて、日本人学生向けに情報発信をしているほか、エージェントが相談会や出願受付等を行っている。



一方、日本の大学は、留学生獲得のためにエージェントを利用することは一般的ではなく、留学生向けのホームページ等も独自で英文のページを作成しているケースがほとんどだが、情報内容が必ずしも充分ではないケースも見受けられる。

エージェントの利用については、エージェントの信頼性などの様々な問題があり、慎重に行わなければならないが、特定の国を対象に留学生を積極的に採用したい場合などには、1つのツールとして利用を検討してもいいかもしれない。

海外大学との連携協定

海外プログラム等は増やす一方で、協定のメンテナンスや新規締結は日英共通の課題である。ヨーク大学は研究型大学である強みを活かすために、研究協力につながる大学との連携を優先し、特定の大学と複数のプログラムでの協力を行っていくことを目指している。日本の大学は、現状、学生交換のみ、研究協力のみ等、協定校との交流が一つのプログラムに限られることが多い。また海外大学との交流の種類も、学部生中心の学生交換やダブルディグリー、研究者(室)単位の研究協力が中心で、交流の種類が限られている。今後は、一つの事業で協力関係にある協定校の中から特定の大学とは、積極的に、様々な共同事業を展開させていくことが望ましいだろう。このためには、協定校との情報交換を進めると共に、学内の情報共有をより積極的に行う必要があろう。

同窓会及び同窓生の活用

日本でも「ホームカミングディ」など同窓生向けのイベントをする大学も多くなっているが、日本の大学特に国立大学はこれまであまり、積極的に同窓会を活用してきたとは言い難い。今回訪問した他の英国の大学でも同窓生へのアプローチを工夫しているようだったが、ヨーク大学では資金集めにとどまらず、学生獲得に積極的に卒業生を活用している。海外在住の同窓生をブランドのアンバサダーとして、留学フェアや現地でのリクルーティング活動をしてもらっている。英語で情報発信をすればよい英国の大学と違い日本の大学が同じことを行うことは難しいが、主に留学生で組織されている海外の同窓会組織と大学としてどのように連携し、留学生の獲得に結びつけるか、また卒業生が海外の大学や組織でどのような地位にあるかなどを把握し、大学間の連携関係構築にいかに関活用できるか検討するためにも、同窓生に向けた英語での情報発信や定期的な同窓生データの更新などを効率的に行う方法を検討する必要性を感じた。

5. 報告者所感

世界に積極的にアピールする必要性

ヨーク大学を含め、どの大学も世界ランキングをはじめとする様々なランキングや、各種賞の受賞歴等、客観的な評価を非常に重視しているという印象を受けた。例えばヨーク大学も、2011年に6つの分野でQueen's Anniversary Prize(英国で最高の教育機関に与えられる賞)を受賞したという紹介があったが、他のどの大学でもこのような受賞歴や、様々なランキング等の紹介があった。

一方、日本の大学では、客観的なデータとしては偏差値や就職先等、どちらかといえば国内の受験生向けのデータが重視されているという印象がある。このあたりの違いは、大学を取り巻くそれぞれの国の事情の違いがあると思われるが、今後日本の大学も、優秀な学生の獲得に向けて外国の大学と競争していくためには、世界レベルの客観的なデータを対外的に積極的にアピールしていく必要があるだろう。

学生支援の強化(留学生および国内学生)

過去20年かけて授業料の徴収化が進んできた英国は、学生＝カスタマーという認識が非常に強い。そのため、授業料有償化以前に比べ、学生の大学生活が充実し、最大限成長できるよう大学が積極的にサポートを行っており、職員の業務は既存業務を回すだけでなく、新たな業務を取り入れていっているようだった。日本の大学も、学生、留学生の声を聞くこと、海外のベンチマーク大学(類似あるいは目標大学)と比較することで、現状理解を深め、よりよいサービスへの改革へつなげられるよう活用できよう。



学生を活用する仕組みづくり

どの大学においても、Student Ambassador やインターン生として、留学生、入学予定生のサポート業務や補助業務に学生の活力を取り入れていた。学生にとっては就職活動でアピールできる等のメリットがあり、大学にとっても、サービスを受け手に近い立場でサポートできる学生スタッフの存在を高く評価していた。学生が行える業務の精査やトレーニングには手間もかかるが、留学生の増加や学生支援サービスの充実を図る上では、積極的に活用していく仕組みづくりが有効ではないか。

強力なリーダーシップと大学戦略

ヨーク大学は創立 50 年で世界トップレベルの大学（世界大学ランキング QS 120 位、THE 113 位）となり、またラッセル・グループの一員にもなったことが特筆すべき特徴といえる。2006 年以降新たに 200 名の教授を採用し、新しく隣接するキャンパス開拓するなど、この 10 年で人数においてもスペースにおいても 2 倍となったという。また各クラスター（①Sciences②Arts and Humanities③Social Sciences）へ巨額の投資を行うなど、これまでも強力なリーダーシップのもと、大学の運営を行ってきたと思われる。現在も 2014 年 1 月に就任した学長のもと新たな戦略を掲げ、7 つ研究分野の選択をするとともに学際的研究を推奨し、世界レベルの大学であり続けるための戦略を実行している。日本でも大学戦略などを策定しているが、大学が一丸となって達成のため取り組むというようなものとは言い難い。今後は日本も達成に向けた具体的な取り組みや数値目標を掲げ、実行に移していくような体制にする必要があると感じた。

事務職員の人事システムについて

日本の大学、特に国立大学では、事務職員は 2、3 年毎に人事異動があり、ジェネラリスト育成の観点から、国際から人事、総務から研究協力といった形で、部署をまたいで異動することがごく普通に行われている。しかし、ヨーク大学では、各部署で独自に専門性を考慮した職員採用を行っており、採用後は基本的にずっと同じ部署で働き、より専門性を高めているようである。日英の雇用制度の違いはあるが、エキスパート育成のためには、日本の大学においても、一定割合の事務職員についてはヨーク大学の人事システムを取り入れてもよいのではないかと感じた。

（報告担当：芝田 寧子、園山 みお、池田 勉、中村 洋一郎）

1. 大学の概略

De Montfort University (DMU)は、“Art, Design and Humanities”、“Business and Law”、“Technology”及び“Health and Life Sciences”の 4 つの学部からなり、学生数は 22,000 人強、教職員数は約 2,700 人である。レスターに位置しており、ロンドンからは北へ電車で 1 時間半ほどの距離である。

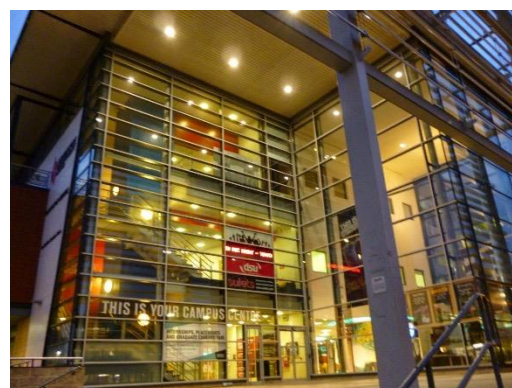
DMU の歴史は、1870 年に Leicester School of Art として設立されたことを起源としており、1897 年に Leicester Technical School (1882 年設立) と合併、1969 年に Leicester Polytechnic となった。1992 年に新たに大学としてスタートし、名称を現在の De Montfort University とした。大学としての歴史は 20 年強という比較的新しい大学である。

なお、2014 年に孔子学院(右写真)を新設し、中国文化に触れる場を提供するなど学内の多様性に富んだ環境作りに取り組んでいる。



2. 訪問スケジュール

- 10:45 Welcome to De Montfort University by the Deputy Vice Chancellor
- 11:00 Development and implementation of international strategy
- 11:30 Running an international office: structure, day-to-day management, staff development
- 12:00 DMU Accommodation Services
- 12:30 Lunch with current Japanese students
- 13:30 Presentation by Japanese University and British Council Japan
- 14:15 Outbound student mobility: #DMUglobal
- 14:45 Developing international partnerships
- 15:15 International student support
- 15:45 Closing remarks
- 15:50 Campus Tour





3. 発表要旨

国際化と次期目標

International Overview

DMU は現在、国内外の大学ランキングにおいて英国で最も高いランキング上昇率を誇る大学である。そしてその要因の一つが大学の国際化の推進であると考えられている。

DMU が国際化に関して掲げるミッションは、「学生、スタッフ、大学にとってグローバルな将来を提供すること」であり、そのために 1. リクルーメント向上、2. #DMUglobal（下記参照）の推進、3. コラボレーションの推進、の 3 つの観点から国際化を進めている。

以上のようなミッション及び取組の下、DMU は 5 年以内に大学世界ランキングの「50 年以内にできた新設大学のトップ 100」に入ること、英国国内のランキングを現在の 54 位から 2 年以内に 40 位に引き上げることを目標としている。

国際部オフィスの運営：構造、日々の業務、及び職員の資質向上について

Running an international office: structure, day-to-day management, staff development

DMU の 2014 年現在の国際部の職員数は 11 名であるが、来年 2015 年には 31 名にまで拡大する。また、現在 26 ヶ国に及ぶ主要なターゲット国を 35 ヶ国に拡大する。

国際部オフィスの活動としては主に、以下の 4 つが挙げられる。

- (1) 海外留学生とヨーロッパの学生の募集：留学生募集は直接、交流校を通して、またエージェントを通して行っている。
- (2) 2014-2019 国際戦略のサポート：#DMUglobal とエラスムス計画による国際戦略をサポートしている。
- (3) 収入増計画の発展：フランチャイズ化やショートコースによる収入増計画を図っている。
- (4) 国際的なマーケティング

上記(1)については、東南アジア・極東、南北アメリカ、中東とパキスタン、南アジアと英国本土の 4 つの地域において、国際的に募集業務に関わる職員により着手されている。

国際部オフィスの活動は、

1.Planning 2.Recruitment 3.Conversion 4.Pre-departure 5.Enrolment のサイクルで実施されている。

1. Planning 段階においては年度毎の戦略的計画、ターゲットの策定、予算の割り当て、奨学金、小冊子等のマーケティング素材の収集を実施している。なお、インド、ネパール、スリランカ等はマーケットポテンシャルがあると考えている。

2. Recruitment 段階においては、中国（北京・南京・広州）、インド（デリー・コーチン）、ブラジル（サンパウロ）、ナイジェリア（ラゴス）をターゲットに募集している。また、代表者によるネットワークの構築、展示会やブリティッシュ・カウンシルとの合同イベントの開催等を実施している。

3. Conversion 段階においては、エージェントと交流先との仲介、カウンセリング、ビザ取得に関するアドバイス、海外オフィスとの連絡調整をしている。またメールによる迅速な申請やスカイプを通じて寮に申し込む等、利用者にとっての利便性が重要と考えている。

4. Pre-departure 段階においては、ビザの申請サポート、オンラインによる寮の申込み受付、在学生と留学予定者を結びつけるサポート、海外オフィスによる pre-departure イベント等を実施している。



5. Enrolment 段階においては、オンラインによる入学手続き、空港までの出迎え、留学生歓迎ウィーク(International Welcome Week)、在学生と新入生を結びつける仲介(i-Buddies)、入学式を実施している。また各学部においても、様々な行事を実施している。

以上の活動が9月の学生入学(留学)を基準に実施されている。

学生寮の提供

DMU Accommodation Services

DMUの寮は8つ、約2,100室ある。8つともキャンパスから800メートルほど、レスターの中心街から徒歩圏内の距離にある。留学生には部屋が保証されており、オンラインで予約することができる。1週間あたりの寮費は100～110ポンド(18,400円～20,000円程度)前後の部屋が多く、大学運営の寮であれば38週、業者運営の寮であれば42週または43週の契約となる。設備は、キッチンと洗濯機は共有、バスルームは部屋により専有または共有、Wi-Fiは一部を除き有料となっている。なお、留学生には、Welcome pack(後述)とは別に、無料の布団、枕及びシーツが提供される。

国際経験プログラム

Outbound student mobility: #DMUglobal

DMUでは5年以内に半数以上の学生に留学経験を提供することを大学の目標としており、国内外問わずあらゆる国際的な経験を促すため、全ての学生対象に#DMUglobalというプログラムを開始した(2013年にパイロットを実施、本プログラムは2014年から開始)。

【海外での経験促進】

既に#DMUglobalの一貫としてサマースクールやインターンシップ、ボランティアやフィールドトリップといったプログラムが開始されており、英国では珍しい教職員の引率による学期内での短期研修も行っている。パイロット施行時のプログラム数は17である。

【学内での経験促進】

外国語の教育や、海外からのゲストスピーカーによる講演、文化的なイベントなどを無料もしくは利用しやすい価格で提供している。

【学生サポート】

#DMUglobalチームとのマンツーマンでのミーティングの他、海外出発前のセッションなども実施しており、#DMUglobalのプログラム前後のサポート体制も充実させている。

【財政的支援】

#DMUglobalのプログラムで海外に行く学生は全員奨学金を受けることができる。金額としてはヨーロッパへの派遣学生が200ポンド(36,800円)、それ以外の地域への派遣学生が400ポンド(73,600円)。また、#DMUglobalのプログラムで渡航する教職員への財政補助も実施している。

国際交流の発展

Developing international partnerships

DMUの国際交流に関する活動は1989年より始まった。現在は2014-2019国際戦略構想に基づき、英国及びヨーロッパやUAE、東南アジア諸国の教育機関(私立・公立)及び産業界において、学生や教職員同士の流動を促進することを目的に、パートナーシップを構築している。

パートナーシップを結ぶにあたり、学術的な質の高さや学術的に異なる背景を相手機関が有していること、戦略的に長期間に渡り関係を結べること、社会的価値、地域的価値、経済的安定性があること等を考慮している。さらに、危機を予測し、監視と再検討を怠らないことを重要視している。

教育的交流においては、学術的な質を保持した専門的なサービスをチームベースで提供しており、計画・交流・マネジメント・実践・確認のサイクルで運営されている。

DMU コラボレイティブプロビジョンには以下のとおり、いくつかのタイプがある。

- (1) Enhanced Progression Agreement による部局間交流。学生間交流はエラスムス計画による活動が活発である。
- (2) Progression Agreement による Joint Award。学生間交流は交換留学により実施されている。Joint award とは、2 以上の学位授与機関が共同でプログラムを実施し、1 つの学位を共同で授与するプログラムの実施体制を指す。
- (3) Articulation Agreement による Dual Award。学生間交流は海外留学により実施されている。Dual award とは、2 以上の学位授与機関が共同でプログラムを実施し、各機関の学位を取得できるプログラムの実施体制を指す。

これらにより、国内に 7 カ所、海外に 5 カ所のコラボレイティブパートナーがある。なお、DMU 大学奨学金は 2,500 名が、それ以外の奨学金は 500 ~ 700 名の学生が受給している。

留学生支援

International Student Support

DMU では留学生をおもてなしの心で迎え入れ、充実した学生生活を提供するため、以下のようなサポートを行っている。また、留学生向けの情報を International Student Guide²という冊子にまとめており、インターネット上で公開している。

◆On Arrival

留学生を空港まで出迎えるとともに、到着日を不自由なく過ごせるもの一式 (Welcome pack: 右図) の準備など留学初日から快適に過ごせるような配慮を行う。Welcome pack には簡単な食事の他、DMU のグッズ、SIM カードや日用品が含まれている。また、後述する Student Gate Way では、Free Wi-Fi を提供しており、初日からインターネットに接続することができる。



◆During Terms

1. International Welcome Week の実施

学期開始時に、留学生用に International Welcome Week を開き、情報提供のためのセッションやシティツアーを行い、不慣れた状況になじめるよう機会提供を行う。

2. i-Buddies システムの導入

International Welcome Week で迎えられた後は、留学生は望めば Buddy スキームに登録することができる。i-Buddies では、DMU の在学生在が「buddy」として留学生とペアとなり、留学中の相談から社会イベント参加や友達作りなどにいたるまでの生活環境を整えるためのサポートを行う。

3. 勉学へのサポート

母国語ではない英語での勉学をサポートするために、専門のスタッフが英語能力のサポートから学術的な内容の相談にいたるまでサポートを行う。

² <http://www.dmu.ac.uk/documents/international-documents/2014-international-student-guide.pdf>

4. Student Gate Way の設置

DMU では、学生に様々なサポートを提供しているが、その窓口となるのが Student Gate Way である。雑誌や新聞などの情報源から、メンタルヘルスケアや生活全般の相談、旅行などのイベントの企画にいたるまで、学生が求めるあらゆるサポートの窓口として対応する。



4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取組み・方針等について

留学生の獲得と支援

留学生の獲得という点では、授業料と奨学金の設定を戦略的に行っていると感じた。英国大学では EU 域外の留学生の授業料は EU 市民に比べ非常に高価(約 3 倍)であるが、DMU は EU 市民が年間 9,000 ポンド(約 165 万円)のところ、EU 外の留学生は年間 11,750 ポンド(約 216 万円)と、差額を少なくしている。また、日本人、韓国人及び台湾人のみを対象とした、奨学金がある。また、留学希望者向けに日本語のウェブサイトを設けている。

留学生の支援は、「留学生支援」の項目で上述したとおり、空港への出迎え、日用品一式(Welcome pack)と寝具(布団、シーツ及び枕)の無償提供、i-Buddies 等、充実している。留学前、留学初期のサポートは特に手厚く、安心して留学できる体制が整えられていると感じた。

今後の留学生の増加及び多様化を考慮すると、サポートの充実は重要な取組であると思われる。

海外経験の促進

英国の学生は海外経験をあまり望まない「内向き」な学生と言われており、大学側が海外経験の促進を図っている。「国際経験プログラム」にて述べたとおり、留学プログラムの内容等に関しては日本の大学と大差ないと言えるが、大学の提供するプログラムに参加すると全員が奨学金を受けることができる。留学生はさらに手厚い財政的補助を受けることができ、英国以外の海外経験を積む機会が与えられている。

コラボレーション

海外の教育機関等との連携に力を入れている。それにより、例えばフランチャイズでは海外にしながら DMU の教育を受け、その証明を受け取ることが可能となる。大学側としては、英国の大学というブランドを生かして自国外の教育ニーズを満たすことにより、財政源の確保が期待できる。

5. 報告者所感

大学としての歴史が比較的浅いこともあり、有名大学では力を入れないような細かいところも充実させようとしていると感じた。また、今回訪問した大学全般にいえることではあるが、特に新しい大学ほど学生の満足度向上を重視していた。

昼食時の懇談時に大学院生の日本人留学生と話をすることができたが、授業料が他大学に比べ安価であることと、留学生にも奨学金が用意されていることが決め手だったとの話を聞くことができた。その他、Campus Tour では 3 名の現役学生が案内を担当するなど、学生を取り込んで大学を作っていくという姿勢を感じた。

国際化についての取組みを学び、まだまだ日本の大学もチャレンジす





ることが多くあると感じた。特に、ブランディング、レピュテーション・マネジメント、留学生へのサポート体制はとても整っており、感心させられることが多くあった。イギリスの大学のみならず、今回参加した日本の 15 の大学の様々な国際化に関する取り組みについて学ぶことができ、大変有意義な研修となった。また、参加者 18 名との交流を通して、自分の業務に取り組む姿勢を改めて考えさせられる良い機会となった。

（報告担当：松島 史秋、岡 翔子、本庄 弘樹、上里 美和）

第6回英国大学視察訪問 参加者リスト

参加者リスト(所属機関名アルファベット順、敬称略)			
1	西川 奈津美	千葉大学	学術国際部国際企画課 係員
2	松島 史秋	一橋大学	国際課 事務職員
3	江口 幸史	関東学院大学	社会連携センター 課長補佐
4	芝田 寧子	慶應義塾大学	学生部国際交流支援グループ 事務員
5	岡 翔子	神戸大学	学務部 一般職員
6	本庄 弘樹	神戸大学	企画部 一般職員
7	上田 純平	京都大学	研究国際部国際学生交流課交流支援掛 掛員
8	松尾 勇太	九州大学	国際部外国人留学生・研究者サポートセンター 係員
9	日笠 誠	沖縄科学技術大学院大学	アカデミックサービス セクション 渉外調整コーディネーター
10	南 さやか	大阪大学	総務企画部国際交流課 事務職員
11	フナキ 明美	立命館アジア太平洋大学	アドミッションズ・オフィス国内 アドミッションズ・カウンセラー
12	伊藤 盡	信州大学	人文学部 准教授
13	星 久美子	信州大学	人文学部 特任准教授
14	渡辺 幹博	東北大学	国際交流課 係長
15	園山 みお	東京工業大学	国際部国際連携課企画・調整グループ グループ長
16	池田 勉	東京工業大学	研究推進部 研究企画課 総務管理グループ・グループ長
17	中村 洋一郎	東京外国語大学	学生課キャリア支援係 係長
18	上里 美和	横浜国立大学	学務・国際部国際課 主任

(所属機関・役職は2014年11月時点のものです。)